Y・M・D・A・-やめさしてもらうわ。どうもありがとうございました。-

Site and Diagram

敷地　ダイアグラム

大阪・道頓堀

かつてエネルギッシュな上方商人の力を背景に、上方を中心に栄えた元禄文化。中でも道頓堀界隈は、喜劇、歌舞伎をはじめとする芝居の街として沸き立ち、演劇は、大阪の豊かな人情を生み、大阪全体に活力を与えていた。

それに伴い、芝居の休憩時間に食事をする芝居茶屋も立ち並び、道頓堀には通り一面に行燈や提灯がつけられ、空が見えないくらいの旗がたなびいた。
その後道頓堀には弁天座・朝日座・角座・中座・浪花座の五座の櫓が立って演劇の町として一層賑わった。

現在では五座の櫓であった角座・中座・浪花座は劇場としての機能は失い代わりに飲食としての機能を持つようになり、演劇の町から度派手な看板が立ち並ぶくいだおれの町として知られるようになった。

その一方で、このお笑いブームの中、劇場を必要としている若手芸人が大阪には数多く存在する。本来、道頓堀は「食」と「芸」が両立し、調和してにぎわっていた　。

この五座の櫓であった角座・中座・浪花座と対面し、 道頓堀の中心地でもあるくいだおれの街の雑居ビル群に、食と芸が重なる「間」をつくり、笑いが絶えない劇場空間を挿入し、かつての芸の町としての道頓堀を蘇らせる。

戦争は歓楽街である道頓堀に暗い影を落とし、昭和19年（1944）3月5日には当局の通告のもとに中座・角座が休場を余儀なくされ、茶屋も疎開するなど、道頓堀は文字通り灯が消えたようになった。そして翌20年3月13日夜の空襲で松竹座を除く全劇場が焼失する。

敗戦直後の不幸な時代を乗り越えると、道頓堀は再び灯りを取り戻した。昭和21年の浪花座、22年の角座、23年の中座と次々と復興する。昭和32年（1957）の全面改築以来、往時の劇場建築を髣髴とさせる姿で存在感を放っていた中座が、平成11年閉館した。さらに追いうちをかけるように1年後の平成14年、解体工事中の現場から出火し、全焼するという事態となった。
また浪花座も同年閉館し、現在道頓堀で昔日の芝居町の面影を残すのは松竹座と映画館の角座、道頓堀東映のみとなっている。

site

浪花座

道頓堀にある五座のうちの一であった、2002年1月に閉館した。
現在では、派手な看板が目につく巨大フードテーマパークの「道頓堀極楽商店街」となっており姿を変えている。

中座

道頓堀にある五座のうちの一つ。、藤山寛美が松竹新喜劇の上演の拠点にするなど、上方芸能を支えた。老朽化と営業不振で一時閉鎖され、大阪府の文化財の破風を残して、取り壊された。
現在では、飲食店が入ったビル「セラヴィスクエア中座」となっている。

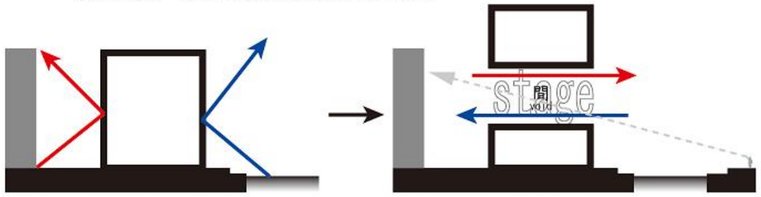
角座

五座の櫓のうちの１つで、江戸時代は「角の芝居」とも呼ばれた芝居小屋であった。B1 角座と呼ばれる小さな演芸場が現在あるが、飲食店が入るレジャービルとなっている。

Site plan S=1/1500

diagram

現在の敷地は、道頓堀川と商店街側との接点はなく、完全に空気が隔離された状態にあり混じり合うこ　とがなく、川方向に対する方向性は薄い。



現在の雑居ビル群に劇場空間である大きな間を空けることで、そこでこの敷地の両面性のある空気が芸の機能を媒体として混じりあわせる。商店街側にも今まで閉ざされていた道頓堀川の空気が流入するようになり、より道頓堀川の気配を感じさせる。また、対岸の遊歩道から stage 越しに道頓堀の商店外側の空気や光を見ることができる。

さらに、構造体でもある新たな「間」を下部の看板建築の既存部分に突っ込む。その「間」は上下の空気を混在させ、舞台での気配、音、光をすべてに浸透させる。

スポットライトを当てる　相方にツッこむ

道頓堀の風景を作り出している看板部分を残し上部の雑居ビル群を上に持ち上げる。
そこに生まれる「間」に劇場空間の機能を持つオープンスペースを作り出す。

開演　間をおく

こられらの雑居ビル群は２つの表情を持つ。道頓堀の風景を作りだしている看板建築と一般的な雑居ビルの２種類のファサードが混在している。

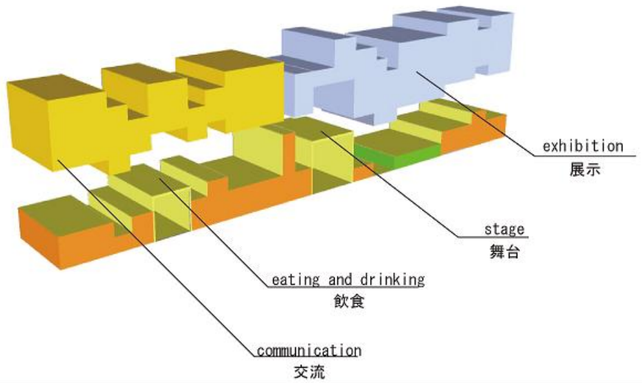
コンビ結成

現在の大阪道頓堀に立ち並ぶ飲食や娯楽などの機能を備えている雑居ビル群。これに漫才の要素で建築に対し、ボリューム操作を行う。

program

下部部分の大半は、道頓堀の看板建築のファサード部分までを既存のまま残し、機能も残す。
また、部分的に道頓堀の遊歩道側との行き来を可能にするために既存の躯体部分を用い、外形を残したまま大きな開口をあけて、グランドレベルでさらに道頓堀川の空気が流入し、川方向にも引き込むようにコンバージョンしている。他に一部分がホールの裏導線と管理部門に割り当てている。

上部の建築部分は大きく展示施設と芸人同士または一般の人が交流を　もてる機能を持った施設を計画している。展示施設では、道頓堀の演劇の歴史に関する資料が展示されており、道頓堀界隈の芸の町としての成り立ちを知ることができる。交流施設では、無所属の若手芸人たちが集まり、情報交換、プロモーションの作成、観客の人たちとコミュニケーションがとれる場を計画した。



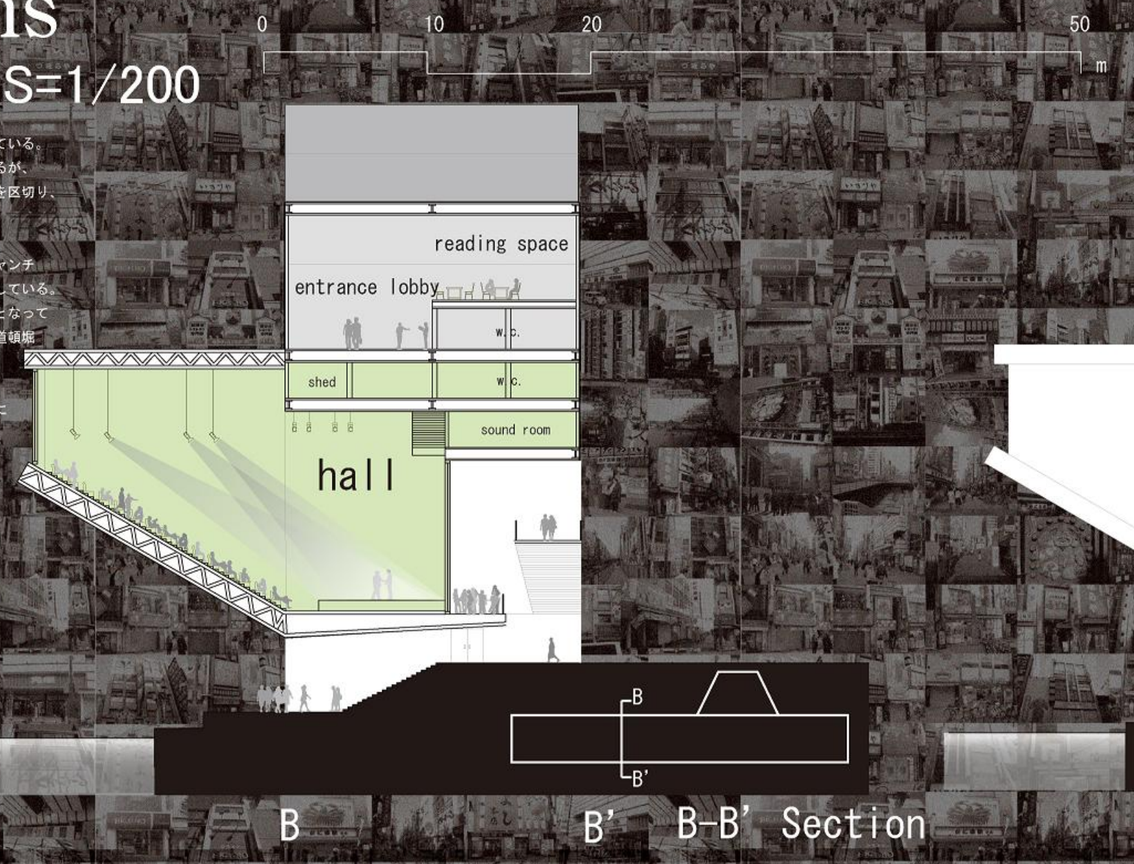
Sections

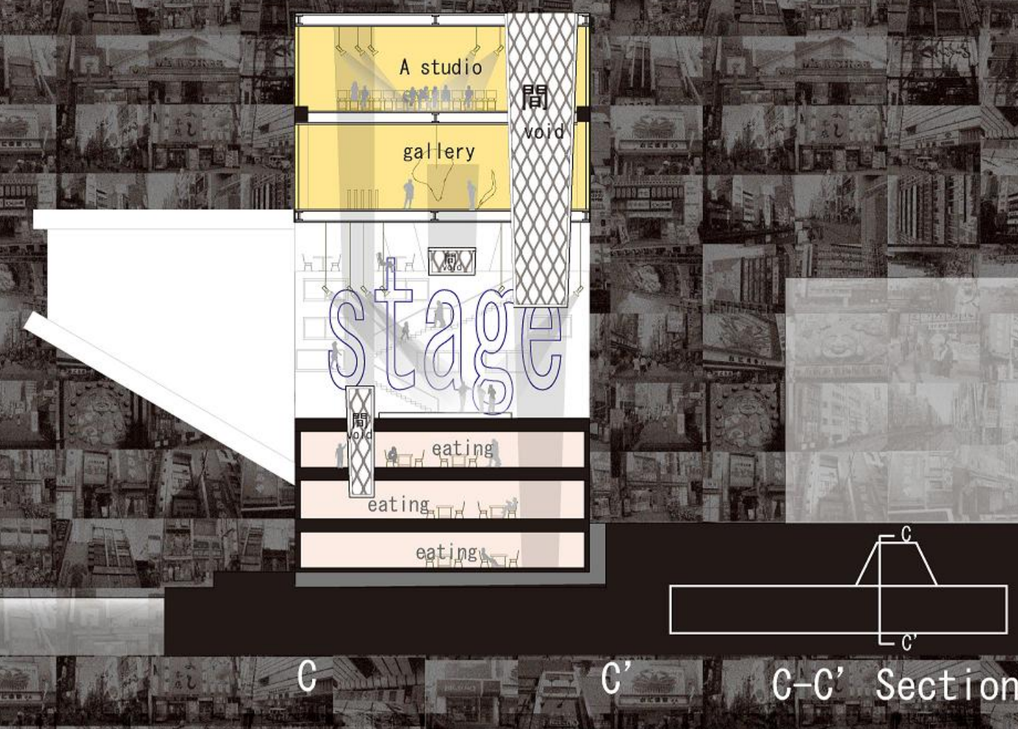
断面図　S=1/200

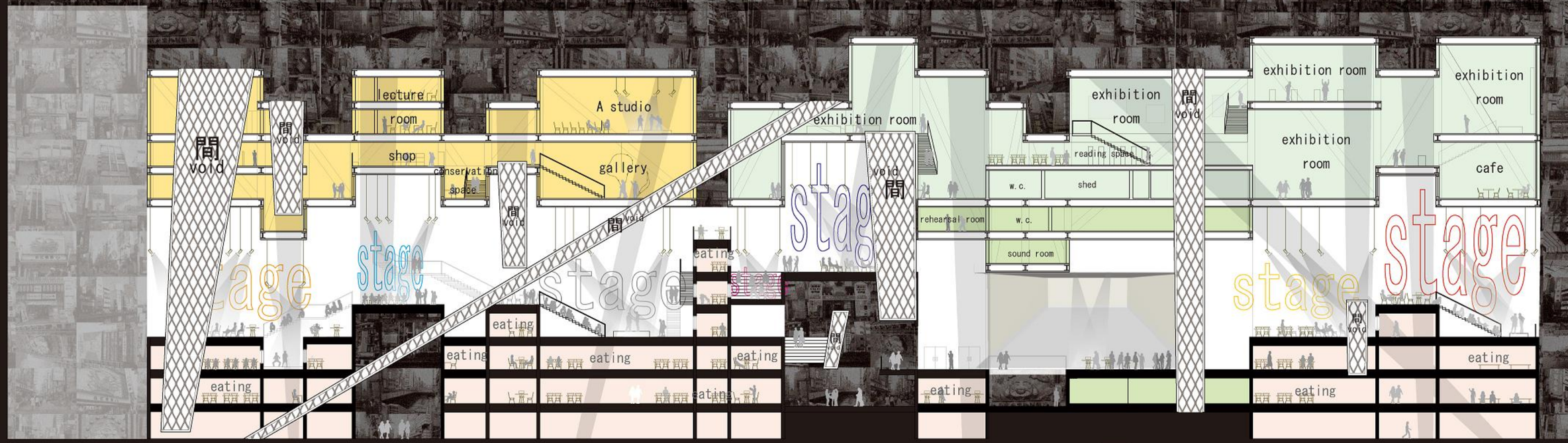
断面計画においては、建物のボリューム操作によって
生まれた凹凸のある空間が一つ一つの劇場空間をつくっている。
空間的には、１３０ｍのリニアな劇場空間が連続しているが、
既存建物の残し方によるスリットのアップダウンが視線を区切り、
それぞれが独立した多様な劇場空間を生み出している。

スリットの空間に差し込まれたホール部分は観客席がキャンチ
レバーにより川にせり出し、印象的な風景となるようにしている。
また、ホールの舞台、観客席ともに、後方がガラス壁面となって
おり、ホール内部で劇場の空気をとどめるのではなく、道頓堀
全体に伝わるように計画した。

既存部分で劇場空間に突出している部分は開口を新たなに
設け、食事しながら芸をみることできるようにした。







Y・M・D・A・-やめさしてもらうわ。どうもありがとうございました。-